

第7章 自由記述分析からみえてきたこと（質的分析）

第1節 調査の内容と結果

本章は、セクシュアル・ハラスメントについての認識・見聞・経験などを4段階尺度によって問うた19項目の質問の後に、最後に付加した自由記述欄の回答を分析した結果を報告する。

問12として設定された文言は次のとおりである。『もしさしつかえないようでしたら、「あなたが受けたセクシュアル・ハラスメント」の内容について、セクシュアル・ハラスメントが生じた状況や、なぜその状況下でセクシュアル・ハラスメントが生じたと思うか、なども含めてできるだけ詳しくお書きください。スポーツとは関係のないセクシュアル・ハラスメントについてもけっこうです。または、セクシュアル・ハラスメントに対するあなたのご意見を書いていただいてもかまいません』

この文言については、スポーツの場に限定する案、セクシュアル・ハラスメント経験のみを問う案など種々検討されたが、調査対象者には多くの一般大学の学生が含まれること、任意記述であるからスポーツに限定すれば回答数が少なくなる可能性があること、また講義時間内に他の学生たちとともに記述するのであれば多くの時間をかけて書くのに抵抗が生じること、などを斟酌して、「できるだけ自由に書けるように」と配慮して上述のものになった。すなわち、スポーツにあまり馴染みのない学生や、セクシュアル・ハラスメントを受けることはほとんどないであろう男子学生にもこの欄に書けるように工夫し、それによってスポーツの場でのセクシュアル・ハラスメントとそれ以外の場でのセクシュアル・ハラスメントとの異同を読みとる手がかりが見つかる可能性を期待した。

結果は、3,587部の調査票を配布し、3,382部を回収したが（回収率94.3%）、記入のあったものは787部（23.3%）であった。

第2節 分析の方法

まず787部の文章群全体から何が読みとれるかを探り、次に、女子学生と男子学生、体育系学生と一般学生（以下、体育群・一般群と略す）に分類して、その間にどのような異同が見られるかを探り、更に、事実か意見か、事実に関しては場所・相手、身体か言葉かなどの分類を並行させながら検討し、またスポーツ関連の記述を抽出してそこにどのような特徴が見られるかを探った。

記述内容は、当然ながら、何行にも及んで切々と綴られた長文のものから、1行にも充たない素っ気ないものまで、多種多様であった。同じ分類群に処理しながらも、その内容には重度の深刻さがうかがえるものもあれば、あつけらんとした明るさを感じさせるものもあり、数値化することの限界も認めざるをえなかった。特に、セクシュアル・ハラスメントというような問題は数に帰しうる問題ではなく、たとえ少数であっても、被害者が種々の苦痛を受けているのであれば放置できない問題であることを思えば、なおさらであった。

従って、それらを分類して数量比較する作業を進めながらも、そうした大量のデータを、幾つかの分類のもとに繰り返し読むことによって、そこから何が見えてくるかを探ることに努めた。

第3節 分類結果の概要

787部の内訳は、女性658(83.6%)、男性129(16.49%)であり、この中で体育群に分類された者は、女性192(29.2%)、男性40(31.0%)であった。

このうち、単に“意見”に留まらず、何らかの“事実”に関して記述されたもの(それに対する意見が付記されているものも含む)は284あって、女子学生の体育群では80(41.7%)、一般群では195(41.8%)と、ほぼ同一の割合を示した。(ちなみに、男子学生の一般群にも「私は男性ですが、満員電車の中で体をしつこくさわられたことがある。女性に」というような事実で分類される記述が9件あった。)

これらを一覧表にして示すと以下のようになる。

女子学生 658		男子学生 129	
体育群	192 (事実を記述 80)	体育群	40 (事実を記述 0)
一般群	466 (事実を記述 194)	一般群	89 (事実を記述 9)

第4節 セクシュアル・ハラスメントに対する“意見”から読みとれる諸特徴

女子学生の58.2%(383名)、男子学生の93.0%(120名)が意見のみを記述していたが、事実で分類された記述もそのほとんどすべてに、その事実に対して何らかの意見や考え、ときには憤りを付記していたのであって、その意味では、本節は自由記述全体から読みとれる諸特徴の報告である。

<全体から読みとれる特徴>

まずセクシュアル・ハラスメントという言葉はよく知っているものの、それがどういう事態をさし、どういう概念であるかはよく把握されていない事実が浮かび上がった。

これは、必ずしも学生のみには言えることではなく、一般に妥当することかも知れないが、わざわざ時間を割いて自由記述にも記入してくれた協力的な学生たちであったにもかかわらず、「セクハラは定義がはっきりしないので難しい」や「どこからがセクハラになるのかの境界が判らない」という言葉がかなり散見され、特に男子学生の記述で明確にそう書いているのは21.0%もあった。

第6章の報告にあるように、「性的な関係をしつこく迫る」に代表される明白なセクシュアル・ハラスメントならあまり疑問も生じないのだろうが、19項目のひとつひとつに答えていくうちに、判定する基準はどうなのだろうとか、境界はどこにあるのだろうか、という疑問を感じ、それが最後の自由記述に反映したさまがうかがえる。「セクシャルハラスメントという言葉を知りたり使ったりしていても、今このアンケートをやってみて、自分の中で理解できていないことを気づきました。男性から受けて嫌だと感じたことという、今の時点での私の認識の中で、この質問に答えたいと思います。」(女性・一般群)という言葉で始まる記述がそうした心境を端的に表していると思われる。

ただ、“事実”に分類された記述にも女子学生の12.9%が痴漢行為と思われる経験を書いており、その延長線上のイメージしかないと思われる記述がかなりあった。もちろん、痴漢も広義のセクハラには入るだろうが、痴漢は、何も新たにセクハラという言葉・概念を適用せずとも成立する明白な犯罪行為である。セクハラがある種の権力関係に基づいて行われるものだという視点があまりなかったのが気に

なった。確かに、対価型もしくは代償型と違って、環境型のセクシュアル・ハラスメントでは必ずしも権力が介在するわけではないにしても、大量の記述を読み進めていく中で、単にいやらしい言動、エッチな言動というようなイメージでしか把握されていない印象が残った。

<性別による相違>

本研究は「女子学生」を主たる対象にしたものであるため、第3節での数字が示すように男子学生の対象数が少なく、性別による相違を読みとるには不十分なものと云わざるをえない。しかし男子学生による129部の記述の一般的傾向として、境界が判らないから困るという戸惑いを表明して終わっているものが多かったのに対して、女子学生の記述には同様に「境界線は人によって違うから難しい」と書きながらも「受けた人はとても嫌な思いをしているので…」や「気にする人はとても気にするので…」という文章などに少なくとも自己の周辺に被害経験を見聞して実態を知っている様子が見てとれたことを指摘しておきたい。

男の人は別にそんな気はなくって言ったことや行動でも、気にする人は、とても気にするので、気をつけた方がいいと思う。(女性・体育群)

スポーツをやっている際は、真剣にやっているし、今まで不本意なことをされたことはないが、学校の先生やバイトからは、小学生の頃から身に覚えがあり、とても嫌な思いをしてきた。(女性・体育群)

注) 以下にも引用する自由記述の文章は、可能な限り原文に忠実に写した。すなわち、明かな誤字脱字や文意が通じにくく思われる箇所を少し修正した以外は、ひらかなや漢字もすべて原文通りとした。但し、個人が特定されることが危惧される文章に関しては、伏せ字にするなどの処置を施したものがあ

同種のことはあるが、セクシュアル・ハラスメントという言葉への反発を感じさせる記述が男性の場合には22.7%に及び、共感を表明している記述とほぼ拮抗していたのに対し、女性で明確にそうした反感や疑問を示しているのは4.3%にすぎなかった。

反発を感じさせる記述の代表的なものは、「セクハラを意識が過敏になりすぎている」や「なんでもかんでもセクハラと言ってしまうのはおかしい」というものであるが、「セクハラという言葉が横行しすぎて、ささいなことを大きなことにしていないか」とか、「すぐにセクハラというふうにとられると、コミュニケーションが取りにくくなる」とかの反発も散見された。以下に、その代表的なものをあげる。

私は、逆に、「セクハラ」について、社会・女性が過剰に反応しすぎていると思います。上司が肩をポンとたたいただけでセクハラだとか何とか言って、私はその方が変だと思います。言葉でも、少しのことですぐにセクハラになってしまい、男性は女性にどう接したらいいのかと思います。少しくだけた接し方もあるし、時にはふざけて少し性的なことも言うてしまうこともあると思います。その全部を否定していたら、男性と女性のコミュニケーションは、とてもかたくて、よそよそしいものになってしまうのではないのでしょうか。(女性・一般群)

セクシャルハラスメントという言葉が横行し過ぎて、多くの人がある流行にのり、ささいなことを大きなことにしていないか。男性から女性への言動があるように、女性から男性への言動がある。女

性のみの解答なんてアンケート自体、セクハラではないか。ちょっと皆過度にセクハラ、セクハラと叫び過ぎているように思える。(男性・一般群)

こうした相違は、セクシュアル・ハラスメントが、一般的にはあるにしても、男性＝加害者、女性＝被害者という構図をもつところから生じるものと推測される。従って、男子学生の記述には自己防衛的な意見も散見された。その一例は、次のようなものである。

女性は最近、あまりにもセクシーなかつこうをしすぎているので、セクハラされてもしかたがない。イスラム教徒のようなかつこうをしてもなおセクハラが発生するようならば問題は男にあるが…。(男性・一般群)

セクハラはいけないことであるが、セクハラという言葉が武器にしている女性はある意味逆セクハラになるのでは(体験はない)。そのような人のほとんどはキムタクに同じことをされたらセクハラとは言わないと思う(特に体をさわるさわらないのところ)。言葉によるものはそれほど誰からとか関係なく嫌な気分になると思う。(男性・一般群)

このような記述を幾つも読み進めると、特に男子学生には、セクハラという言葉が流行語のようにマスコミをにぎわしたところに男性側から種々に言われたステレオタイプな言説が浸透しているさまがうかがえるように思われた。

<体育群の学生と一般群の学生の相違>

女子学生が書いている“事実”の多くがアルバイト先での性的言動や痴漢行為の記述であって、これは体育群・一般群に共通し、女子学生が最もセクシュアル・ハラスメントに遭遇しやすい場がアルバイト先であることに現代の女子学生の生活パターンがうかがえる思いがした。

ただ、注意すべきは、アルバイト先でのセクシュアル・ハラスメントの記述の多くが、「もうそのバイトはやめるつもり」とか「それがいやでやめました」とかで終わっているのに比し、体育群では、当然ながらスポーツ場面における記述が含まれ、そこには「相手より胸が小さいのによく勝てたな」のような冗談にしてしまう性的言動の卑劣さに不快感を覚えながらも、簡単にやめることができずに我慢している姿が浮かび上がった。その代表的な例は次の記述に見ることができよう。

合宿係になって、合宿最終日、部員に胴上げをしてもらった。その際、先輩に「お前ら触っとけ」と冗談で言われた。身体的特徴が話題にあがるのは日常茶飯事で、「胸がある・ない」「脚が太り・細い」「誰かと比べる」など。女子はみんな適当に流している。(女性・体育群)

コーチというのを利用して、ケガをするとやたらと体にさわったり、はだをださせたりした。ケガしてていたいけど、こいつは何だと思った。関係ないと思うけど、何も言えなかった。(女性・体育群)

女性というだけで男性から嫌がらせをうけるのは本当に耐えがたい苦痛です。私は×××を長年やってきましたが、高校のころ合宿中に(他県の強豪校)すごいうわさを耳にしました。指導者が部員を部屋に呼び、レギュラーになりたかったら…、試合で負けたから…という理由で、何人もの生徒に性的関係を迫りました。みんな地方からレギュラーになりたくて来ているため反抗できないし、親にも言えなかったそうです。でも、ある生徒が親に真実を話したところ、その先生は認め、つかまりま

した。本当の話です。純粋な生徒の気持ちを裏切って…本当に許せません。(女性・体育群)

無論、後者のような記述に満ちているわけではなく、中には、「練習中、先生やコーチ(男)が、足ふといとか、ケツでかいとか、お前とだけは結婚したくないとか…。よけいな世話だ。」というような逞しさを感じさせる記述もあるが、多くの記述に、傷つき苛立ちながらも、受け流したり、我慢したりせざるをえない姿が垣間見られることを指摘しておきたい。

なお、男子学生に関して付言すると、「境界や基準が曖昧だから困る」という趣旨の記述が、体育群で37.5%、一般群で12.7%、「信頼関係があればセクハラにならない」という趣旨の記述が、体育群で15%、一般群で3.8%と、いずれも体育群の方が多かった。そこから何かを引き出すにはサンプル数が少なすぎると思われるが、一般群の男子学生の記述には、セクシュアル・ハラスメントはどこかよそごとのイメージが付随したのに比し、体育群の男子学生の記述には、そう言われるかも知れない身近さが感知され、それ故に共に高い数字を示しているのではないかと思われた。つまり、**<性別による相違>**で触れたような反発も示しながら、同時に、気をつけなければならぬものとしての自衛意識も感じられた。

<スポーツ関連の記述に見られる特徴>

スポーツ関連の記述は、“事実”が90、“意見”が62あった。なお、“事実”のうち、19(21%)が体育授業に関わり、その他のほとんどは部活動・運動クラブでの記述だった。

事実の方では、小学校での出来事を思い出して、あれはセクシュアル・ハラスメントだったのかと思って、抵抗する術を持たない時期に受けたセクシュアル・ハラスメントが心の傷になっている記述が散見され、思春期にある中学生の頃の記述では、胸が大きいとか生理に関する無神経な言葉や、水泳授業での無遠慮な視線に傷つけられたり、必要以上の身体接触に抵抗を感じたりしているものがあった。中には摂食障害やリストカットにまで及んでいる深刻なケースさえあった。

小学生のとき担任がスポーツに関してすごく熱を入れて指導してくれていた。先生はマッサージの仕方とかストレッチの仕方の見本をみせるとき、女子しか使わなかった。けっこう胸とかまでさわられたり、普段も尻とかさわられてなんかへんだなと思ってたけど、今おもうとつらいしこわい。水着のときの柔軟体操の見本とかはとくにはずかしめられてる気がしていやだった。股関節をひろげるやつとか。(女性・一般群)

走ると胸がゆれて、それを見て感想を述べられるのがすごく嫌です。走っているのを見られたくないと思います。(女性・体育群)

走れていない時に体形のことを皆の前で笑い話のように話されてとても嫌な気分になった。ストレスなどで体重が大学に入ってから増加し、自分でもとても気にしていたので、皆の前で口に出されたのがむかついた。言われたことで余計ストレスになった。体重のことを毎回口に出されると、余計ストレスになって精神的にやられ、逆に食事制限をして食べなかったことがあり、トレーニングをしているのに体を痛めつけていたと思う。(女性・体育群)

私は大学一回生の時、男子×××の中に一人選手として活動していたため、とてもいやな思いをたくさんした。競技と称して、いやらしいさわられ方をしたことは毎日のようだった。スタイルに

ついて言われたり、傷つくこともたくさんあった。その後、女子チームもそろったが、練習は一緒にすることも多いのでチームメイトも色々と思うことはあるだろう。やはり、いやらしいさわられ方とそうでないものは違いがわかる。さらに言えば、私は男子からの体に関する言葉、「太っている」や「むねが小さい」などから、過食となり、又、リストカットをするようになった。現在も苦しんでいる。しかし、「くやしい」からやめないし、何より×××が好きだ。ずっと女子校に通っていたせいか、又、家族も女性ばかりだったせいか、男性のそのような性的な行動には敏感、かつ嫌悪感がかなりある。(女性・一般群)

意見の方では、スポーツ指導やマッサージなどで身体に触るのはセクハラではないとする好意的意見が18%あったが、指導はできるだけ言葉で行うべきで度を過ぎた接触はセクハラになるとする非好意的意見もほぼ同数の17%あった。これは19項目に含まれていた質問を意識しての言及であろうが、それがいかなる状況でどのように行われるか、また記述者がどのような経験をしてきたかなどによって見解が異なるのは当然のことだろう。従って、

私は今まで“教育的指導”をセクハラだと思ったことはありません。教師の真剣なまなざしを知っていたからです。(女性・一般群)

ときっぱり言い切る記述から、次のように、ややひっかかりを感じながらも、受け入れるべきことと自らに言い聞かせているようなニュアンスが感じられるものや、後から振り返って疑問に思うものなど、明らかにセクシュアル・ハラスメントと認められるものなど多様な記述が見られた。

私はコーチを心から信頼していたので、1度もセクハラだと感じたことはありません。もし、私が信頼していないような人や、ふつうの人なら、ふれられるだけでも嫌ですが、競技者として、勝負師として、頑張ってきていたので、先生のして下さいは全て受け入れていました。(女性・体育群)

中学生の頃、部活動で先生によくマッサージやテーピングをされていました。当時は何も思わなかった事が多かったのですが、今思うと結構セクハラに近い事だった気がします。ですが、信頼もできる先生なので、非常に複雑な気持ちです。また、そう思っても親にも何となく言いづらさがあります。(女性・体育群)

高校の部活で、腰を持って、引きよせられた。マッサージをしてやると言われ、うつぶせに寝たら、ブラをなぞりながらマッサージをやられた。(女性・体育群)

高校生の時にテーピングとかマッサージの勉強をしてる先生がいて、部活で疲れたりしていたのでマッサージをよくしてもらっていたのですが、部活の練習後にマッサージをしてやるから職員室に来るようになっていわれて行ったんですが、ちょうど私と先生しかいなくて、レオタードを着てたんで、レオタードになれないかって言われて、無理ですって断ったのですが…。いつもよくしてくれる先生だったので、そのままマッサージしてもらっていて、疲れたのでウトウトしてしまっていたら、マッサージが終わった後におなかをマッサージしたの分かったかって言われて、おなかが張ってるって言われて、少し恐ろしくなってすぐ帰りました。(女性・体育群)

マッサージやテーピングを含めて、「信頼関係があればセクハラにはならない」という記述はかなり

あり、30%近くに及んだ。確かに、そうした信頼関係が成立している指導もあろうが、指導者の方がそう思い込むことの危険性はこうした記述からうかがわれるだろう。特に、以下の記述に見られるような思いで我慢している女子学生もいることを思えば、「信頼関係があれば」という言葉も、かなり疑問視せざるをえない。

スポーツをしていて指導を受けているときに体などをさわられても、「指導だからなんだ」と思うしかないし、その行為に対して、セクハラだと言ってしまったら、指導を受けられなくなってしまうかもしれないと考えてしまう。だから我慢するしかないのかと疑問に思う。(女性・一般群)

体育や、スポーツ活動の時などは、「体育の一環だ」と言われれば言い返しにくし、指導を受けているときなどは、肩や腕などに触れられても、「仕方ない」と思ってしまいます。(女性・一般群)

第5節 考察

以上、自由記述欄の分析結果を報告してきたが、本研究の課題である『スポーツにおいて女子学生が経験するセクシュアル・ハラスメントの現状とその特殊性』という観点から、更に若干の考察を試みておきたい。

特に、質問紙調査によるセクシュアル・ハラスメント認識において、19項目中17項目において体育群が一般群より認識が低かった分析結果が出ており、我々は、体育群、即ち、スポーツの場にいる人々はセクシュアル・ハラスメント認識が甘くなる傾向にあり、なぜ“スポーツの場”ではセクシュアル・ハラスメント認識が甘くなるのかについての示唆が自由記述欄からも得られるのではないかと考えた。しかしながら、既述のように、自由記述欄への書き込みは、分量の点でも内容の深刻さの点でも多種多様であり、それらを数量的に処理して、そこから一義的な結果を導出することの問題性を認識せざるをえなかった。ただ、膨大な量の自由既述を繰り返し読む中で見えてきたものもあり、それがどの程度の客観的妥当性をもつものかについては若干の保留を余儀なくされるものの、その幾つかを指摘しておきたい。

まず見えてきたのは、たとえ小学生の頃の出来事であったとしても、女の子たちは冗談を装いながら為される性的な言動の卑劣さを鋭く見抜き、それに嫌悪している事実であった。＜スポーツ関連の記述＞で紹介した小学生のときのことを思い出して「今思うとつらいしこわい」と書かれているのはその代表的な一つだが、何年生の頃のことかは不明ながら、ここには、その行為がどのようなものを認識して抵抗する力はないものの、そこに尋常ならざるものを感じている幼い目が厳然とある。このことは他の多くの記述にもうかがえ、女性の多くは、それが信頼関係に基づくものなのかどうかは直観的に判るものであり、卑劣なセクハラであるかどうかは見抜いていると思われる。個人差は否定できないものの、同じ＜スポーツ関連の記述＞にあった「やはり、いやらしいさわられ方とそうでないものは違いがわかる」という言葉をまず確認しておくべきだろう。

しかし、相手は先生であったり指導者であったりするのだから、幼くて言えなかったり、高校や大学になってそこに明白な嫌悪や苛立ちを感じていても、それを批判的に指摘するのを思い留まらせたっている姿が浮かび上がってくる。特にスポーツの場では、次に挙げるような思いがかなり共有さ

れているところがあって、それが一層、嫌悪や苛立ちを封じ込める働きをしていると思われる。

指導中に腕や肩にさわるのは、その方が理解しやすいので効率の面でいいと思う。また、スポーツの場ではマッサージも重要でセクハラという意識を持たなければ、いいことであると思う。個人指導もその人の成長に期待してるからの事であると思う。また、おちこんでいる時に励ましのために体にさわられるのは共感してくれてると安心できたりもする。このようにスポーツの指導場面では変な気持ちで接しなければ日常生活でセクハラになることもスポーツの現場ではなり得ないことがあると思う。性的な経験や性生活においては、興味が湧き、知りたい一方、自分の事は話したくない、知られたくない人にとってはとても苦痛である。人に聞くことは避け、自分が他人に話してもいいと思う事だけ話せる環境がほしい。(男性・体育群)

この男子学生の考えを直ちに否とするつもりはない。彼は誠実にこの調査に臨んでくれて、誠実に自らの思いを記述してくれている。ただ、「効率」という言葉が前面に出てくることによって、セクシュアル・ハラスメントという事態が封印されてしまいかねない懸念は指摘しておきたい。ここでは、熱心な指導者が「変な気持ちで接しなければ」、指導中に体に触れることもマッサージも問題はないと正当化されている。しかしながら、彼に欠落しているのは、たとえ「変な気持ちで接して」いなくても、それに不快や嫌悪を感じたりする女性がいるかもしれないという配慮である。別の男子学生はこうした配慮について次のように書いている。

スポーツの指導の場合、ある程度の身体接触はしょうがないとは思いますが、それですら、セクハラと感じる人もいるものです。ゆえに、指導者は極力、身体接触はさけるべきだと思う。やむをえない場合は、しっかり「ちょっと足を上げるぞ？」などと許可を得るべきだと思う。我々男性は無意識である事が多いので、最大限の努力で避けなければならない。(男性・一般群)

確かに、「いやらしいさわられ方とそうでないものは違いがわかる」という多くの女性の言葉を前提すれば、「変な気持ちで接しなければ」、それはきちんと通じるはずだという考えも成り立ちそうである。ところが、セクシュアル・ハラスメントが問題にしているのは、「変な気持ちで接する」のが論外なのは言うまでもなく、たとえそうでなくても、女性によっては不快や嫌悪を感じる言動がありうるのだから、それには配慮しなければならないということである。悪意がなかったから免罪されるというものではない。それゆえに、先の学生の論理では、「セクハラという意識を持たなければ、いいことである」となってしまう、裏返せば、スポーツの場では「セクハラという意識を持つことが悪いことである」と帰結しかねない。

敢えてこの男子学生の見解を論じたのは、彼が示してくれた考えの中に、スポーツ場面におけるセクシュアル・ハラスメントへの姿勢の一つが典型的に現れていると思われたからであり、同時に、こうした考えが女子学生たちの中にもかなり浸透していて、それがスポーツ場面におけるセクシュアル・ハラスメントを隠蔽し続ける要素の一つになっていると思われるからである。つまり、<スポーツ関連の記述>で引用したように、不快感・嫌悪感を持ちつつも、それも「指導の一環だ」と自らに言い聞かせたり、場合によれば、それに嫌悪感で反応している自分を過敏なのではないかと思ったりすることによって、そうした言動を拒否してしまえない傾向が認められる。「信頼関係があればセクハ

ラにならない」という数多く見られる記述にも、敢えて言えば、そう思い込もうとしている節もうかがえ、若干の疑問を懐きながらも、その疑問を封じ込もうとしている姿も読みとれなくはない。要するに、スポーツの場の女性たちには、そうした考えに適応せざるをえない状況があり、それが、スポーツにおけるセクシュアル・ハラスメントを顕在化するのを防ぎ、またスポーツにおけるセクシュアル・ハラスメント認識を甘くもしているように思われるのである。

従って、スポーツの場でのセクシュアル・ハラスメントへの対処は、通常、そういうものだと思って「適当に受け流している」か、続けて指導を受けたいがために「我慢する」かのどちらかになりがちなのが現状だろう。ただ、記述の幾つかには、この両者とは異なる戦略が散見された。それは、職場の女性たちも使っているだろう戦略の一つであって、別に珍しいものではないだろうが、

セクハラは自分の受けとり方だと思う。バイトでいやらしい事を言われても、ギャグにできる人もいるし、ちょっとしたことですごく不快に感じる時もある。私は慣れたので笑ってごまかしてします。嫌な時は「それってセクハラですよ！」と言います。(女性・体育群)

のように、セクハラという言葉を使ってセクハラ的な言動をかわしたり軽く諷めたりする方法である。ただし、TV シーンにも出てきそうだが、男性側もこの言葉を使ってごまかす戦略をとったりしていて、以下に二例を紹介する。

飲み会で3次会、4次会までつれまわし、3時、4時くらいまで、無理やり付き合わせて、なかなか家まで帰らせてもらえない。その上、「また、セクハラと言われるかなあ」などと笑いながら平気で言う。(女性・体育群)

高校の時、こもんの先生が女子部員の前で、ケイタイのアンテナを上下にこすり、「たった！ たった！ オイ！ こすったらたったぞ！！ ワハハ」と得意そうに言っていた。電波のことだけど、先生はいやらしい意味でいったくせに、いざ、うちがいやらしいと言うと、「なんでだ？ 電波がたったと言っただけだろ？」と言いかえす。合宿中、夕食に出たにんじんを私が「にんじんキライ」と言ったら、すかさず、顧問が「何だ？ ニンジンキライか？ じゃあチンチンは好きか？」と言ってきた。男子部員もいる中で。部活中もアイツはチチばかりでかいとか、デブだとか、さんざんでした。ある日、「先生、それはセクハラです」といったら笑い話にされて、他の先生の前で、「お前の得意なセリフを言ってみろ！ ほら！」といわれ、ムリヤリ、「先生、それはセクハラです」といわされた。ギャグにされた。(女性・体育群)

後者の例はセクシュアル・ハラスメントもいいところで、論外な教師と言う他なく、この女子高生にとっては何らかの形で訴えるしか方法はないのではないかと思えるのだが、前者のように、セクハラという言葉の逆手にとって反応をうかがったり揶揄したりする方法にも同種の卑劣さを感じざるをえない。こうしたやりとりを幾つも読んでみると、改めてセクハラという言葉が我々の社会に定着してきたのを思うと同時に、この言葉ないし概念をどのように育てていくかの重要さを思い知らされた。最後に、こうした事態を端的に表現している記述を紹介する。

スポーツのクラブ活動では、昔から、先生、上級生のいうことは絶対で、さからえないような風潮があった。そのため、励ましのため肩やうでをたたいたり、触ったり、お尻をさわったりという

ようなことが、平気で（日常茶飯事のように）行われてきたように思う。自分では嫌だなと思っていても、知らないうちにならされたり、こういうものだと思い込んだりして、今ならきっとセクハラといってもおかしくないようなことがあった。これほどセクハラがいわれなかったらずっと続いていくと思うので、セクハラとはどんなものか、もっと知らせること、いけないということをお互いに（する側もされる側も）認識することが第一歩だ。今までがあまりにも無知であったこと、男の人が女の人を低くみていることがまかりとおっていたように思った。（女性・一般群）

彼女が書いているように、セクシュアル・ハラスメントという言葉が入ってくる前には、女性たちは、職場や学校で不快感を覚える言動に接しつつも、単なるモヤモヤした苛立ちや嫌悪に終わって、それを拒否するにたる論理を持ちえず、多くの男性たちも自らの言動の問題性に気づけず、男女ともに、ただ嫌な男だなという感じに留まっていただろう。しかし、現在では少なくともセクハラという言葉は共有化されている。ある男子学生が「この前、ボランティア中に、小学生の女の子に、僕の友達が“高い高い”をただけで、その友達は小学生から“セクハラじい”と呼ばれるようになってしまった。最近は小学生でもセクハラという言葉をよく使う。」と書いていて、「最近は、何かあるとすぐセクハラだとする傾向が強い気がする。セクハラとセクハラ行動を区別しておかないと、男性はかなりひかえた行動、言動しかできなくなる。」（男性・一般群）と嘆いているが、確かに、小学生でも知っているほどに、この言葉は社会に浸透していて、それゆえにこそ、女性が冗談めかして言うことで防御策に使ったり、男性が揶揄に使ったりすることが可能になっている。

しかしまた、言葉は共有されていながらも、概念として定着しているとは言えず、それゆえ、境界や基準が曖昧だという指摘とともに、同じ行為が相手次第でセクハラになったりならなかったりしてもいいのだろうかという戸惑いも散見され、セクシュアル・ハラスメントは自分にとって **unwelcome** であれば成立するのだという認識も希薄だった。セクハラという言葉が流行語として云々された頃によく言われた「相手がキムタクならいいくせに…」のというステレオタイプな反論が彼女らの心にもインプットされている観があって、そのために、「それが本当にセクハラと言っているものなのかわからない」という思いを生じさせてもいた。

先の学生の記述に倣って言えば、「セクハラとはどんなものか、なぜそうした言動が問題なのか、そうした言動を廃することでどのような社会や人間関係が開けてくるのか、などをもっと知らせること、もっとお互いに（する側もされる側も）認識することが第一歩だ。」ということになるだろう。この言葉を揶揄に使ったり、過剰反応だと嗤ったりする声が、社会にもあるし、学生の記述にもある。そうした方向へ向かわせるのではなく、この言葉・概念にさらなる肉付けを施し、それを社会的にも共有する方向へ向かうことこそが、現在の我々の課題と言えるだろう。